

2018年学習の行き先

■ ■ 英語教育改革により
どう変わる？

近年、グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語を扱う力が重要視されています。2020年からの英語教育改革によって、学校における英語学習が大きく変わります。小学3年生から外国語活動（英語）が始まり、5年生からは英語が教科化し、習得度によって評価されるようになります。また、大学入試センター試験にかわって新たに導入される大学入学共通テストでは、英語の4技能「読む」「聞く」「話す」「書く」の力が評価されることとなります。一方で、日本マーケティングリサーチ機構（JMR）が行った調査によって、小中高校生の保護者の94%が、学校の授業だけでは英語を話せるようにならないと思っていることがわかりました。

これまでの学校での英語の授業という、どうしても受験を意識してしまうため、ひたすら単語や文法構造を覚え、長文読解をするというイメージが強いです。もちろん覚える作業、つまりインプットはとても大事ですが、それだけでは英語は話せるようになりません。単語や文を読んだり、聞き取ったりできる子どもはたくさんいますが、いざ会話の中で、自分のことについて話したり、相手に質問したりというやりとりをすると、難しく感じる子どもが多いようです。普段は英語の問題をすらすら解き、英語が得意科目だという子どもが海外を旅行したとき、外国の方と全く喋ろうとせずがっかりした、という保護者の話を聞いたことがあります。保護者としても、英語を学習しているからには、わが子が外国の方と英語でコミュニケーションをとっている姿を見たいことでしょう。

英語教育改革をうけて、自分の意見を書いたり、話したりすることに重点をおいた授業を実施する学校も増えてきました。覚えた単語や表現をアウトプットして自分のものにすることで、実際のコミュニケーションにおいても、英語を使いこなせるようになるのです。また、話す力を強化するためには、外国の方とのコミュニケーションに慣れることが大事です。そこで各学校における、英語を母国語とするALT（外国語指導助手）の

役割が重要になります。ALTを導入している学校は多く、ALTの授業が好きだという子どもも多いようです。ALTの授業は、子どもたちに楽しく英語に触れてもらうために歌を歌ったり、ゲームをしたり、他国の文化を学んだりするようなものが多いです。ただ、それだけでは英語を話せるようにはならないので、ある程度英語に慣れてきたら、少し長めのやりとりをする時間も必要です。お手本として、教科担当教員とALTが楽しそうに会話する様子を、子どもたちに見せることが効果的です。そのときにイラストのカードを使ったり、少し大ききでもいいのでジェスチャーを交えたりすると、子どもたちを「話してみたい!」という気持ちにさせることができるでしょう。ALTと子ども、または子ども同士で長めの会話をする時間をとることで、話す力の強化につながります。

今後、英語教育改革により、話す力を重視した授業はさらに増えるでしょう。英語でのコミュニケーションが楽しいと感じ、たくさん話したいと思わせることができれば、子どもが学校の授業だけで英語を話せるようになることも、不可能ではありません。外国の方とコミュニケーションをとることは英語学習の醍醐味です。その面白さに気づき、積極的に話せる子どもが増えることを願います。（文／学林舎編集部）

【学林舎推薦英語多読システム】

Raz-Plus・Raz-kids

Raz-Plus・Raz-Kidsは、世界の160ヶ国以上で使われているデジタル英語副教材です。Raz-Plusには、印刷可能なebook（電子書籍）やワークシートがダウンロード、プリントアウトできます。Raz-Plusの中に含まれているRaz-Kidsは、スマートフォン、タブレットなどで多読学習が可能です。Raz-Plus・Raz-Kidsは、アメリカ、カナダの50%以上の学校で使用されています。Raz-Plus・Raz-Kidsの学習プログラムは少ない予算でも導入が可能なため、学校用の教材として適しています。多読学習用の教材として、生徒の学習をサポートします。無料トライアルをまずはお試しください。

2018年子どもと大人の行き先 習慣化できる子とできない子

子どもが自立して学習し、学力をつけていくためには、日々の家庭学習を習慣化していくことが欠かせません。しかし、家庭学習を習慣化できる子と、できない子がいます。この差はなぜ生まれてくるのでしょうか。今回は家庭学習の習慣化について、学習時間と学習環境に着目して見ていきます。

子どもが勉強をすることが好きであれば、進んで勉強をしましょう。しかし、常に勉強をしたいと思っている子はなかなかいないでしょう。そのため、学習を習慣化するには、子どもが勉強をしたいと思えない時に、いかに勉強をするようになれるかが重要なポイントになってきます。

1つめのポイントは、勉強をする時間と場所を決めておくことです。例えば子どもが、少し遊んでから勉強しようと思っていたが、夢中で遊び過ぎてしまい、気がつくともう遅い時間になっている。仕方ないので勉強は明日することにしよう、と思うことはよくあります。そこで、1日のうちで何時から何時まで勉強する、と決めておき、しっかり守っていくことで、そのようなことを防ぐと同時に、学習の習慣化につながります。ここで重要なことは、無理のない学習時間を設定することです。長すぎてすぐに続けられなくなるような、明らかに無理のある時間設定はよくありません。また、もし何かの事情で決めた時間が守れなくても、あきらめずに続けていきましょう。重要なのは、短い学習時間でも、継続して習慣化につなげることです。

2つめのポイントは、学習環境を整えることです。例えば、取り組んでいる問題がわからず考え込んで進まない時、近くに置いてある漫画本に手が伸びて読み始めて勉強をしなくなる、というような経験をした人もいることでしょう。この場合、近くに漫画本があることが問題なのです。漫画本、ゲーム、テレビ、パソコン、スマホなど、現代の家庭には子どもの気を引くものであふれています。勉強をする気になれない時、なかなか集中できない時に、それらは格好の誘惑材料になります。そのため、勉強部屋には、できれば勉強に関わる物以外

は置かないことです。少なくとも、自分が好きで気を引かれるものは決して置いてはいけません。勉強部屋と、遊んだり休んだりする部屋を別にすることで、勉強と遊びの間に、時間的、空間的に区切りをつけるのです。

それでも、特に今まで学習の習慣がなかった子は、なかなか集中力が続かない日もあるでしょう。そのような日でも、決まった時間に決まった場所に座る、というだけでも続けることが重要です。学習のための空間をつくることができているならば、学習に集中できない状況になっても、他のことができる環境にありません。そこで、学習する教科を変えてみよう、学習のやり方を変えてみよう、というように、その子なりの工夫もでてくるかもしれません。

学習の習慣化を目指す時、先にも述べた通り、できない日があってもあきらめずに続けていくことが大切です。そして、毎日の歯磨きのように「やらないと気持ち悪い」と思えるようになれば、学習の習慣化は成功です。そのためのポイントは、時間を決めること、勉強する部屋の環境整備、そして、続ける意識です。これらのことをしっかりとできていないと学習の習慣化はできません。これが、学習を習慣化できる子とできない子の差となり、学力の伸び方の差ともなって表れてきます。

(文/学林舎編集部)

【学習習慣・リズムをどうつくっていくか!?!】

大人になればよくわかるのですが、「子どもの時に学習習慣・リズムがしっかり身につけていけば、もっと“学ぶ”ことに対して苦労しなかった」と。

成長する思考力GTシリーズを継続的にご利用いただいき効果を実感しているお子様の話をお聞きすると「朝、学校行く前の30～40分を毎日」「夕食前の30分を毎日」など。これは、すべての“学び”に通じる“継続は力を生む”につながっていきます。

子どもの時の生活習慣・リズムはもちろんのこと、学習習慣・リズムを身につけられるかが“成長の鍵”といえます。(北岡)

クロスロード Crossroad

第 85 回 文 / 吉田 良治

● 思考の扉を開く

4年前の9月9日朝日新聞が、当時阪神タイガースで活躍していたマット・マーソンの特集記事“文武両道で人生は輝く / 野球漬け、教育をおろそかにしていないか”を掲載しました。野球に限らず日本のスポーツ界は、スポーツで活躍するためには、全てを犠牲にしてその競技一筋に生きることを美德としてきました。大学や高校のスポーツでも学業を疎かにし、スポーツだけすればいいという文化が、今も根深く続いています。日本で6年間プレーしてマーソンが感じたことは、日本のプレーヤーたちがスポーツ以外何もしてこなかったことで、引退後の生活に不安を抱えていることでした。実際日本プロ野球機構(NPB)が秋に実施している若手選手育成のフェニックスリーグで、毎年セカンドキャリアの意識調査をしています。平均して7割の選手が引退後の人生に不安を持っているデータが出ています。朝日新聞の記事のタイトル“野球漬け、教育をおろそかにしていないか”という問いかけは的を得ているといえます。

2年前の9月に知人を介して、日本大学第三高等学校野球部の生徒が、私に連絡をしてこられました。ジョージア工科大学のトータル・パーソン・プログラムについて詳しく知りたい、とのことでした。日本でこのプログラムについて詳しい人を探し、私の名前を見つけたとのこと。なぜジョージア工科大学のトータル・パーソン・プログラムが知りたいのか、色々話をしていると、4年前朝日新聞に掲載されたマーソンの特集記事を読まれたとのことでした。この記事でマーソンが文武両道の重要性を強調した真意、母校のジョージア工科大学で実践した、トータル・パーソン・プログ

ラムのことを例にして、アスリートは学生時代どんな生き方を身につけるべきか、その一つの術として、このプログラムのことを共有しました。

この方は高校1年生の時、練習試合でイレギュラーバウンドを顔面に受け、眼底骨折を患いました。極端な視力低下に一時選手生命の危機にあったそうです。その時彼の父親から問われたことは、息子の人生から野球をとったら何が残るのか、ということでした。怪我を治してプロ野球選手になる！と強がったそうですが、視力の回復が芳しくなく、真剣にセカンドキャリアを考えなければいけない、と思った時、マーソンの記事に出会ったそうです。

特集記事の最後はこんな一文で締めくくられていました、“バッターボックスから出てみませんか”です。つまり、野球一筋ではなくもっと広い世界で生きるために、思考の扉を開きましょうということです。そのマーソンの一言でこの高校球児は、野球だけの生活から学業も真剣に取り組み、学業成績はトップレベルの成績を上げるに至りました。現在は法政大学に進学して野球部に所属しながら、学業との両立は勿論、野球を引退した後の人生のことも真剣に考え取り組んでいるそうです。彼にとってマーソンの記事との出会いが、野球だけの生活、狭い世界の思考の扉を開ききっかけになったのです。

昨年朝日新聞がこの元高校球児のことを取り上げました。記事のタイトルは“野球の次は広がった”でした。つまりマーソンのバッターボックスから出てみませんかという問いかけに、自分の意志でバッターボックスから出たとき、彼は目の前に広い世界があるのだ、と気づいたのです。

狭い世界の思考はアスリートのセカンドキャリアだけでなく、様々なリスクにもつながっています。今日本で起こっている不祥事の多くも、狭い世界の思考と根っこで繋がっています。現役のアスリートは勿論、指導者、そして競技団体に携わる方々など、スポーツ界の関係者は一度思考の扉を開いてみてはいかがでしょうか！

(つづく)